

## 科学・機械文明を告発するLawrenceとJeffers

田部井 世志子

キーワード：科学、機械、文明、Lawrence、Jeffers、告発

### はじめに

経済産業省が平成23年4月12日（火）に、「平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による東京電力（株）福島第一原子力発電所の事故・トラブルに対する INES 評価」について、3月18日以降に得られた情報を踏まえ、「レベル7」との暫定評価を公表した。

3・11、日本人は、人類はこの日を記憶に留めるべきである。否、いやがおうにも歴史に刻まれるべき日となった。3月11日に起こった東日本大震災と津波、そしてその後、引き続いて福島第1原子力発電所から水素爆発が起こり、放射能が漏れ出した。人類は自ら生み出した科学技術、機械文明といかにつきあっていくべきか、これは今、人類に課せられた火急の問題であり、避けては通れない議論すべき問題となった。科学文明の恩恵に浴している現代人は、一筋縄では行かない難題を抱え込んだといえよう。

本稿では、科学・機械文明の発展の問題にいち早く目を向け、その功罪について議論した詩人として、また、とりわけそれに対して否を唱えた詩人として、イギリスの D.H.Lawrence (1885-1930) と、アメリカの Robinson Jeffers (1887-1962) を取り上げるにより、現代における機械と人間、科学と人間の在り方について両者の知見に耳を傾けることにしたい。一見、同じ主義主張の持主たちだと捉えられがちな両詩人であるが、詳細に見ていくことで、その相違点も明らかにできればと思う。

### Lawrence と Jeffers の接点

まず、Lawrence と Jeffers の関係について、簡単に触れておきたい。生まれた国は違うものの、生まれが2年違いということで、まさに同世代である二人を結びつけようとしたのが Mabel Dodge Luhan であった。Luhan といえば、当時のアメリカ社会において、ニューメキシコのタオスという土地の力を感じ取り、その素晴らしさを芸術活動を通じて表現してもらおうと、「偉大な魂

の持主」と思しき人物たちをタオスの自分のコテージに招待し呼び寄せた女性であった (Karman127)。その「偉大な魂の持主」として呼び寄せられた芸術家の中にLawrenceやJeffersも含まれており (cf. Carpenter 43-44)、Luhan の *Lorenzo in Taos* は、タオスにおける Lawrence との愛憎葛藤の思い出を物狂おしく語ったものであり、彼女はそれをJeffersに捧げたのだった (cf. Vardamis 45)。それを読むと、いかに彼女が Lawrence に期待し裏切られ、また同様の思いを Jeffers にも託していたかが理解できる。

Well, Jeffers, that is all I [Luhan] have to tell you about Lawrence in Taos. I called him there, but he did not do what I called him to do. He did another thing. Perhaps you are the one who will, after all, do what I wanted him to do: give a voice to this speechless land. Something interfered with Lorenzo's chance to do that. Perhaps it was because there was too much willfulness and passion and egotism surrounding him here. The irony of it is that if there is a greater freedom and purity in my wish now, that the life here may become articulate, and that you will be the channel through which it shall speak, it is Lorenzo who released me from my insistent self-will and brought me to the happy immolation that has in it no false desire. You are a clear channel and I think I am become myself a clear one, now, too. (Luhan 280-81、下線筆者)

Lawrence と Jeffers が知り合えば、それぞれにとって多くのものを得ることになるだろうと直覚していた Luhan は、サイン入りの Jeffers の本を Lawrence に送ったが、結局 Lawrence はそれを受け取ることなくこの世を去ってしまったという (Luhan 3)。Luhan にとって Lawrence、Jeffers 共に彼女の期待を裏切る結果になってしまったが、<sup>1</sup> ここで着目したいのは、彼女が両者の内に同様の衝動、あるいは情熱を感じ取ったという点である。だからこそ、Lawrence には叶えてもらえなかった思いを再び Jeffers に託そうと願ったのだろう。

Luhan が同じものを託そうとした Lawrence と Jeffers には、確かに多くの共通点があった。まず、Horace Gregory が説明するように、両者共に熱狂的な信者をもつ詩人であり、出身大学にしてもいわゆる有名大学ではなく、エリートコースを歩んでいないことから、「学究領域における紳士気取りに対してより激烈な形式」を「鼓舞する」点でも似ている (cf.16)。テーマ的にも両者は似たものを追究しているといえる。第一次世界大戦後、女性の社会進出や Freud 研究が進む中、様々な社会的変化と相俟って、セクシュアリティが大事な議論のテーマになったと Robert Zaller はいう (cf.33)。そのテーマを扱った時代の寵児として彼が挙げる中には、アイルランドの Joyce やオーストリアの Musil、そして Lawrence がいるが、これら三者の中で Jeffers との類似点が見出せるのは、とりわけ Lawrence であるという。

In their very different ways, the most gifted writers of the epoch had taken up this theme [sexuality]: James Joyce in Ireland, D.H.Lawrence in England, Robert Musil in Austria. Of these three, it was Lawrence with whom Jeffers had the closest affinity. Lawrence was also the only one of the three whose mature works were available to Jeffers in the early 1920s. (33)

Jeffers が当時、実際に手にすることができたのは、Lawrence の作品だけであったという事実も Zaller は伝えてくれている。両者にとってセクシュアリティは「基本的に無秩序な力であり、すべての因習や慣習を覆すことができる力」であり、両者共にその「破壊的、かつ黙示録的な側面」に心を傾けたという (Zaller 33)。

他にも、たとえば Frederic Carpenter が指摘するように、イエス・キリストやキリスト教における受難の強調 (cf.78, 121) をはじめ、様々な共通点があるだろう。こういった共通点の中でもとりわけ本稿で焦点を当てたいのが、両者に見られる機械文明・科学文明に対する思いの吐露である。そこで以下、科学・機械について謳った両者の作品を、詩やエッセイを中心に見ていくことにしよう。

### Lawrence と科学・機械文明

まず Lawrence であるが、イギリス、とりわけ彼の愛した生まれ故郷の炭鉱町イーストウッドが、19世紀から20世紀にかけて、機械の導入や産業化により徐々に醜くなっていく変化を、彼は次のように憂いていた。

I was born nearly forty-four years ago, in Eastwood, a mining village [...]. To me it seemed, and still seems, an extremely beautiful countryside [...]. To me, as a child and a young man, it was still the old England of the forest and agricultural past; there were no motor-cars, the mines were, in a sense, an accident in the landscape, and Robin Hood and his merry men were not very far away [...].

But somewhere about 1820 the company must have sunk the first big shaft—not very deep—and installed the first machinery of the real industrial colliery. [...]

And the promoter of industry, a hundred years ago, dared to perpetrate the ugliness of my native village. And still more monstrous, promoters of industry today are scrabbling over the face of England with miles and square miles of red-brick “homes,” like horrible scabs. (“Nottingham and the Mining Countryside” 133-34)

また Lawrence の科学や機械文明批判といえは数多くの著作品に見出せるが、とりわけ彼の人生の総決算ともいべき作品 *Lady Chatterley's Lover* を抜きにしては論じることができないだろう。物語は次の有名なフレーズで始まり、その中に彼の達した時代認識が吐露されている。

Ours is essentially a tragic age, so we refuse to take it tragically. The cataclysm has happened, we are among the ruins, we start to build up new little habitats, to have new little hopes. It is rather hard work: there is now no smooth road into the future: but we go round, or scramble over the obstacles. We've got to live, no matter how many skies have fallen. (5)

悲劇的な時代にあって、困難を承知の上で生きねばならないという並々ならぬ Lawrence の覚悟の表明であるが、彼が時代を悲劇的と捉える根拠として「産業主義、機械文明、拝金主義や成功の牝犬神 (21) への身売り、知性偏重主義や精神主義、それらに根ざした教育等による人間の内部の空洞化、荒廃、そしてその抽象化の問題」あるいは「個人主義あるいは利己主義の問題」が挙げられると、筆者は拙論「*Lady Chatterley's Lover* における森との絆——エコロジ的『想像力』の意義——」で論じた。吉村宏一氏も次のように論じている。

[……]「我々の時代が本質的に悲劇的な時代である」のは、現代という時代が、生の抽象化が極端に進み、さらに抽象化の産物である機械や機構によって人間が支配されるようになってしまったが故に「悲劇的」なのである。生の抽象化がもはや引き返しようもないところまで進んだが故に、本質的に悲劇的なのである。(152)

本稿においてとりわけ焦点を当てたいのは、吉村氏も強調する「機械」による「生の抽象化」の問題である。Lawrence は科学知識が豊富になるにつれて発展を遂げてきた技術の進歩や機械文明に対して批判をしているのだ。それが著しく反映されているのがクリフォードの描写である。とりわけ、石原浩澄氏も論じるように、エンジン付きの車椅子に乗って森の草花を踏みしだきながら進んでいく彼の姿には、機械によって「自然や人間性を破壊していく産業化」(173)、あるいは「破壊者」(179)のイメージが重なる。現代の悲劇的状況を説明する次の *Lady Chatterley's Lover* からの引用は、上述の車椅子を操るクリフォードと草花の関係を彷彿させるだろう。

The fault lay there, out there, in those evil electric lights and diabolical rattlings of engines. There, in the world of the mechanical greedy, greedy mechanism and mechanized greed, sparkling with lights and gushing hot metal and roaring with traffic, there lay the vast evil thing, ready to destroy

whatever did not conform. Soon it would destroy the wood, and the bluebells would spring no more. All vulnerable things must perish under the rolling and running of iron. (119、下線筆者)

「邪悪」で「悪魔的」、そして「機械的」なものが森を、そして傷つきやすく繊細なすべてのものを破滅へと追い込むだろう、というわけである。一方で、電動車椅子に乗り、まさに機械産業の権化として描かれていたクリフォードとは対照的に、同じ乗り物でも生命力を象徴する馬を愛するメラーズ (cf. 145) の描写に、生命力を謳歌する Lawrence の真骨頂をうかがうことができるわけだが、そのメラーズを通じて Lawrence が強調するのは、今日における「やさしさ」や直接的な「触れ合い」の大切さであった。

「触れ合い」といえば、どうしても思い出すべきは Lawrence のエッセイ “New Mexico” であろう。筆者は既に触れた拙論の中で Lawrence のこのエッセイを取り上げ、そこで提示されているボンボンを覆う「セロファン」とその上をうろつく蠅の関係を、機械文明と人間の在り方の比喻と捉えて論を展開した。「セロファン」は、上で述べた Lawrence の時代認識を促す悪弊——機械文明の発達や知的認識方法、あるいは観念偏重主義など、物事の抽象化を促すものすべて——と考えて問題ないだろう。「セロファン」は確かに我々の生活を豊かに、高尚にしてくれたのかもしれない。しかし居心地のよさを保証してくれるその「セロファン」の存在ゆえに、人間は対象の深みを探ることを止めてしまったのだ、否、探ろうにも容易には探れなくなってしまったのだ。「セロファン」に包まれているボンボンが、セロファンの外から見えるが故に、それと直接接触をしているかのような錯覚に陥り、それで満足してしまっているのである。かくして現代人は直接的な「触れ合い」を見失いつつあるというわけだ。ここで、車椅子に頼り切っているクリフォードを今一度想起することは無駄ではないだろう。セロファンともいふべき車椅子に乗っているクリフォードは生命の「破壊者」であるばかりか、大地との直接的な「触れ合い」が不可能になってしまった現代人でもあるのだ。

余命いくばくかを残して最後に辿りついた以上のような時代認識、科学文明批判は、それまでの多くの作品にも多かれ少なかれ見受けられるが、1929年に書かれた詩集 *More Pansies* や *Last Poems* の中にも、同様のテーマを扱ったものが多く存在する。<sup>2</sup> 以下、いくつかの詩を取り上げることにしよう。そもそも科学や機械は人間にどのような影響を及ぼすというのだろうか。まずは “Anaxagoras” という詩を見てみよう。詩人は Anaxagoras の「雪は黒い」という言葉について、科学者の受け取り方を次のように説明する。

When Anaxagoras says: Even snow is black!  
he is taken by the scientists very seriously

because he is enunciating a “principle”, a “law”  
that all things are mixed, and therefore the purest white snow  
has in it an element of blackness. (*The Complete Poems* 708、以下CP)

Anaxagoras が原理や法則を説いているという点で、彼の言説を「科学」であり「リアリティ」だと科学者はいくかもしれないが、詩人にいわせれば、それは「精神的な奇想、ごまかし、そしてナンセンス」であるという。科学は結局机上の空論に過ぎないといいたくなるのは、直接的に「純粋な雪」を見て我々が感じるのはいは「白」でしかないからだ。

また、“The Scientific Doctor” (CP 620) の中でも、科学は「わたしをモノのレベルにまで還元してしまう」という。そのような科学的な知識によって作成される機械もまた人間にとって「恐るべきもの」を引き起こすものなのである。Lawrence はさらに、機械や鉄、車輪がすべての「邪悪な」原理を生み出すともいい切る。とりわけ「車輪こそが邪悪さの第1の原理なのだ」と“*What Then Is Evil?*” (CP 712) の中で訴えている。

それはどうしてなのか。車輪について生命体との違いを踏まえて Lawrence は “*The Wandering Cosmos*” の中で次のように謳っている。

For life is a wandering, we know not whither, but going.  
Only the wheel goes round, but it never wanders.  
It stays on its hub. (CP 713)

「生命」は「あてもなく彷徨い続ける」 (“wander”) ものであるにもかかわらず、車輪は車軸に固定されてしまい、同じところをくるくる回転し、停滞状態になってしまうからだ。“*Death Is Not Evil, Evil Is Mechanical*” の中でも、本来、生を具えている人間が、命ある存在に特有の「愛や葛藤を免除されてしまう」と、「エゴともいべき車軸に固定され、「彷徨う」ことなく、ただ機械のように「ぐるぐる回転するだけになってしまう」と謳っている (CP 713-14)。また人間は、肉体を具えた生ある存在であるが、それはつまりは死すべき存在でもあるということになる。従って人が己に課すべきことは、「己が死すべき存在であることを知る」ということであるのに、そのような生ある存在としての自己を否定してしまうと、人は車輪のようにぐるぐる回り始めるしかないのだ。人間は機械と同様、死ぬ時も修理されることのない、ただ壊れるだけの機械のような存在になってしまっている (“*When Most Men Die*” CP 638)。重要なのは、最後は壊れるだけの機械と生あるものの違いなのだ。両者の存在の在り方をそれぞれ一言の形容詞で表現するなら、それは、「機械的」 (“mechanical”) か、「有機的」 (“organic”) かの違い<sup>3</sup> だという。それをちょうど葉と木の

関係にたとえて Lawrence は次のように表現している。

There is the organic connection, like leaves that belong to a tree  
and there is the mechanical connection, like leaves that are cast upon the earth. (“Fallen Leaves”  
CP 615、下線筆者)

結局、Lawrence にとって生命体としての人間の最大の問題は、機械のように生命力がなくなってしまうことなのである。ところが、鉄が人間の魂に入り込むと人はロボットのような存在になってしまう。<sup>4</sup>

And now, the iron has entered into the soul  
and the machine has entangled the brain, and got it fast,  
and steel has twisted the loins of man, electricity has exploded the heart  
and out of the lips of people jerk strange mechanical noises in place of speech.  
 (“Dark Satanic Mills” CP 628-29)

また人間は、本来「生命の驚異に対する崇拜者」であるにもかかわらず、ロボット人間になってしまうと、「エゴイズム」に陥り、ロボットのような「機械的で自己中心的なシステム」に成り下がってしまうという (“Worship” CP 649)。そして今や、周りを見回すと、ロボット人間ばかりになってしまっていると Lawrence は嘆く (“The Gods! The Gods!” CP 651)。

自分はそうはなりたくないと思いつつも、無数の「産業主義の輩」と共に在ると、自らも「生きた屍」になってしまうのである (cf. “We Die Together” CP 629)。一見、彼ら集団は人間の生活を便利で豊かなものにするための救い主となっているかのように思えるが、実はそうではなく、人間本来の本能や直観を奪ってしまうのである。“What Have They Done to You?” には、その思いが綴られている。

What have they done to you, men of the masses, creeping back and forth to work?  
[...]  
Alas, they have saved you from yourself, from your own frail dangers  
and devoured you with the machine, the vast law of iron.  
They saved you from your squalid cottages and poverty of hand to mouth  
and [...]



They took away, oh they took away your man's native instincts and intuitions  
and gave you a board-school education, newspapers, and the cinema.

They stole your body from you, and left you an animated carcass  
to work with, and nothing else:

[...]

Your instincts gone, your intuitions gone your passions dead. (CP 630-31)

かくして、もともとは人間が機械を生み出したにもかかわらず、今では社会自体が機械に支配され  
(cf. "Side-Step, O Sons of Men!" CP 642)、人間までもがロボット人間になり、それはあたかも、  
機械が人間を生み出しているようなものだと Lawrence はいう。

Man invented the machine  
and now the machine has invented man. ("Man and Machine" CP 641)

以上、Lawrence にとって科学や機械は批判すべき対象であるといえる。しかし、ここで疑問が生  
じるだろう。もしそうだとすれば、次に挙げる Lawrence の "Oh Wonderful Machine!" はどう読め  
ばいいのだろう。

Oh wonderful machine, so self-sufficient, so sufficient unto yourself

[...]

Oh wonderful machine, you who are man's idea of godliness,  
you who feel nothing, who know nothing, who run on absolved  
from any other connection!

Oh you godly and smooth machine, spinning on in your own Nirvana,  
turning the blue wheels of your own heaven  
almighty machine

How is it you have to be looked after by some knock-kneed wretch  
at two pounds a week?

Oh great god of the machine  
what lousy archangels and angels you have to surround yourself with!  
And you can't possibly do without them! (CP 643、下線筆者)



機械が人間を表しているとも読める作品であるが、いずれにせよ「機械」あるいは機械人間を「神」と表現し、それを「すばらしい」、あるいは「全能」だと主張しているこの詩は、確かに機械を称賛しているように読める。がしかし、注意深く読めばフレーズの端々に皮肉が感じ取れるだろう。たとえば、「自足」(“self-sufficient”)あるいは「あなただけの涅槃」(“your own Nirvana”)といった表現からもわかる通り、機械は、機械人間は、どんなに「万能」であろうとも、閉鎖的、内向的な自己充足の内にあり、また、機械(人間)は何も知らず、何も感じることもなく、外部との関係性を奪われてしまっている存在だというのである。そして「汚らしい大天使や天使」を取り巻きにせざるを得ず、そして彼らなしでは何もできない存在だと謳っている。全体のニュアンスを汲んだ上でタイトルにもう一度立ち返ると、その中の「ワンダフル」(“wonderful”)という語に、いかに強烈な皮肉の思いが込められているかが理解されるだろう。

以上、見てきたように Lawrence は、直接的に科学や機械に痛烈な批判を浴びせかけるだけでなく、一見、絶賛しているかのように見える詩においてさえ科学や文明に対する批判の目を向けていることを忘れてはならない。

科学文明に浴する中、人間がロボットようになってしまった今日の状況にあって、人間には一体何ができるというのか。“City-Life”では大都市に行った時の詩人の思いを謳っているが、Lawrence は自分ではもはや何もできないと絶望に打ちひしがれている。

When I am in a great city, I know that I despair.  
[...]  
I scream in my soul, for I know I cannot  
take the iron hook out of their faces, that makes them so drawn,  
nor cut the invisible wires of steel that pull them  
back and forth, to work .... (CP 632)

“On and On and On”の中で Lawrence は、機械や機械人間にあらがうことは止めた方がよいともいう。機械はほうっておくしかないというわけである。

Then let it! [...]  
[...]  
Let them run on and on and on—  
It is their heaven and their doom. (CP 643)

しかし、手をこまねいて見ているだけではない。どのような状況にあって、どれほど絶望的な状

況にあっても、自然界の生命体が季節の推移に応じて生命力を回復するように、最後まで希望を捨てないのが Lawrence である。“The Triumph of the Machine” を見てみよう。機械がどんどんはびこっていくと、将来機械が勝ち誇るような状況が到来するのではないかと人々は問う。だが詩人 Lawrence の応えは「否」である。「悲しいことにこの1世紀というもの、機械が勝利してしまい、我々をあちらこちらに転がしてきた」と断言するも、Lawrence は即座にそれを打ち消す。機械が勝利することは決してないと高らかに謳いあげるのである。

Ah no, the machine will never triumph;  
in some hearts still the sanctuaries of wild life  
are quite untouched. (CP 957-58)

では、今日のように「希望のない」時代にあって、機械が勝利しないために、人間はどうすればいいのだろうか。機械に取りつかれてしまった大衆には「逃げ道はない」。そのような中で一人の人間に一体何ができるというのか。2つの道しかないとして Lawrence は“*What Is a Man to Do?*”の中で謳う。

Then must a single man die with them, in the clutch of iron?  
Or must he try to amputate himself from the iron-entangled body of mankind  
and risk bleeding to death, but perhaps escape into some unpopular place [...]? (CP 631-32)

群衆と共に死の道を選ぶか、人類全体から己の身を切り離し、死を覚悟して血を流す危険を冒すか、いずれかの道を選択するしかない。「機械の申し子」ともいうべき、「自己中心の」車輪やロボットのようにになってしまうのか、それとも、「機械化することなく」、自然と密接な関係を持ち続けることのできる生きた存在を目指すのか、いずれかを選ぶしかないのだ。<sup>5</sup> 両者の間には「横断できない溝」が存在するという (“*The Gulf*” CP 635)。だから生き生きとした人間は、これ以上機械に身を捧げてはいけなく、また、ロボット人間から身を引くと Lawrence は訴える。

Oh men, living men, vivid men, ocean and fire  
don't give any more life to the machines!  
[...]  
Oh men of life and of living  
withdraw, withdraw your flow

from the grinning and insatiable robots. (“Hold Back!” CP 639)

以上、見てきたように Lawrence は、機械やロボット人間のことは放っておけと一方でいつつ、少数の生き生きした人間に対しては、希望を捨ててはいない。<sup>6</sup> 問題なのは「生命力が欠如し始めていること」（“What’s Wrong” CP 843）であり、それを回復させるために Lawrence は腐心する。

彼が一縷の希みを託したのは、既に見てきた通り、一つには「<sup>タ</sup>触<sup>ッ</sup>れ<sup>チ</sup>合い」であった。<sup>7</sup> 「産業文明」よりも「触れ合いの文明」の可能性を追求することの必要性を訴えている（cf. “Future War” CP 612、他にも“Signs of the Times” 612を参照のこと）。具体的には、機械（更には財産や金）とかわら<sup>いのち</sup>ずに「生命」との、他の仲間との<sup>コンタクト</sup>接触を持つと “If You Are a Man” の中でも謳っている。

If you are a man, and believe in the destiny of mankind  
then say to yourself: we will cease to care  
about property and money and mechanical devices,  
and open our consciousness to the deep, mysterious life  
that we are now cut off from.

The machine shall be abolished from the earth again;  
it is a mistake that mankind has made;  
money shall cease to be, and property shall cease to perplex  
and we will find the way to immediate contact with life  
and with one another. (CP 666)

生命との「触れ合い」、あるいは人間同士の「触れ合い」によってのみ機械文明を「溶かし去る」ことができるのだ（“Future States” 611）。また、宇宙との交感によってもまた生命力を再確認し、それを取り戻すことができるともいう。宇宙を感じて（“Lonely, Lonesome, Lonely-O!” CP 646）、自然界にあって他のものと同様の存在になり、意識覚醒を促し「機械的な動きや情緒によって死んだも同然の状態」から蘇れという（“Climbing Down” CP 667）。そのような状態から脱出できれば、待っているのは、次の詩にあるような「接触と流れるような全き美の豊かな世界」である。

Oh when man has escaped from the barbed-wire entanglement  
of his own ideas and his own mechanical devices

there is a marvelous rich world of contact and sheer fluid beauty  
and fearless face-to-face awareness of now-naked life  
and me, and you, and other men and women ( "Thrra Incognita" CP 666)

これこそがまさに「『触れ合い』の文明」(“the civilisation of touch”) (“Future War” CP 612)のスタートだといえるだろう。以上、見てきた通り、機械文明に覆われてしまった現代社会から蘇るために、人類の未来に希望をつなぐために、Lawrence は最後の頼みの綱として、「触れ合い」を重要視したのである。

### Jeffersと科学・機械文明

次に Lawrence よりわずか2日遅れでこの世に生を受けたアメリカの詩人、Jeffers について見ていこう。ペンシルヴァニア州ピッツバーグに生まれ、教育熱心な父親の指導のもと、様々な言語、古典、聖書など、多くのことを学び、さらにはアメリカだけでなくヨーロッパでも高等教育を受けることになる。様々な分野の研究をしたが、英文学はもとより、とりわけ医学と森林学という科学の分野の領域も学んだことを強調しておこう。

彼が詩を書き始めたのは1912年であり、1924年に彼にとって運命的な出会いの場ともいえるカリフォルニア州のカーメルに移り住み、<sup>8</sup> 太平洋を眼下に見下ろす地に「トア・ハウス」と呼ばれる石造りの家を建ててからは、そこで創作活動に勤しんだ。

日本では比較的知られていない Jeffers であるが、<sup>9</sup> アメリカにおいては「常に熱烈な崇拜者」を擁し続けてきたという (cf. McDowell 183)。しかし Jeffers 評価の浮沈があったことは無視してはならないだろう。浮き沈みの激しい彼の評価について、Alec A. Vardamis がその流れを要領よくまとめている<sup>10</sup>ので、以下に引用してみよう。

Since Robinson Jeffers first appeared in print in 1912, his critical reputation has undergone radical fluctuations. Idolized in the nineteen-twenties, vilified in the forties, overlooked in the fifties, in the sixties and seventies his philosophic stance helped to inspire a social movement while, ironically, his poetry was largely ignored. Accused of fascism, communism, anarchism, pacifism, isolationism, sadism, misanthropy, and atheism, he remains a poet of great power who has seldom been judged on the merits of his poetry. To trace the ebb and flow of his fame is in many ways to explore the history of American thought in the past seven decades. (44)

1912年の第1作以降、彼の評判は浮沈の多いものだったという。何とんでも偶像化された20年代、そして、人気のバロメータともいえる雑誌 *Time* の表紙の写真として彼の顔写真が1932年に選ばれたという事実からわかるとおり、30年代も彼の人気は高かった。<sup>11</sup> しかし、第二次世界大戦を経験した40年代になると彼の社会観、政治観は嫌われ、中傷されるようになり、50年代になると全く無視されるようになったという。彼の詩が無視され続けた一方で、彼の哲学は60年代、<sup>12</sup> 70年代になり日の目をまた見るようになるが、それは当時のアメリカ社会の動きに影響を与えるものだったからである。とりわけ Jeffers の死後、文学批評界で、自然と人間の在り方を問い直すきっかけを作ったエコクリティシズムという新しい批評理論が取り沙汰され、その隆盛に伴い、Jeffers が再び脚光を浴び始め、再評価の気運が著しいものとなったことを忘れてはならない。<sup>13</sup> Joy A. Palmer をはじめとする *Fifty Key Thinkers on the Environment* の編者たちが Jeffers を「環境に関する50人の鍵となる思想家」の中に含めているのも故なしというわけではないのである。

さて、そのような Jeffers が科学や機械文明に対する思いを訴えた詩を、以下、紐解いていくことにしよう。しかしその前に、生理学の実験室で助手をしていたこともあり、先に述べたように医学、森林学、物理学など、科学の領域でも研鑽を積み、その恩恵も受けた Jeffers<sup>14</sup> の科学に対する立場をまず確認しておきたい。科学や科学理論に対する Jeffers の立ち位置について、まず彼の手紙を以下に引用してみよう。

First, as to the importance of science for the artist and for the thinker. It seems to me that for the thinker (in the wider sense of the word) a scientific basis is an essential condition. We cannot take any philosophy seriously if it ignores or garbles the knowledge and view-points that determine the intellectual life of our time.[...]

For the contemporary artist science is important but not at all essential. He might have no more modern science<sup>3</sup> than Catullus yet be as great an artist. But his range and significance would be limited accordingly. (*The Selected Letters of Robinson Jeffers, 1897-1962* 254)

科学が人類にとってなくてはならないものになりつつあった1930年代の手紙であるということも関係があるだろうが、Lawrence がほぼ全面的に科学を否定したのに対し、Jeffers は芸術家や思想家にとって「科学的な基盤」にとって「科学的な基盤」は「本質的条件」ともいうべき「重要な」ものであると捉えている。たとえそれが「必ずしも本質的でないとしても、その基盤がないことによる芸術家（思想家）としての限界は否めないとも訴える。また、Edward Nickerson は別の視点で科学に対する Jeffers の親密性について論じている。

If there was one area in which Jeffers, the former laboratory assistant in physiology, might see measurable progress, it was in science. In fact, as Hyatt H. Waggoner has pointed out,<sup>4</sup> the maturation of Jeffers as a poet coincided with the incorporation into his work of many references to scientific concepts and terms. He visited the Lick Observatory (where his brother, Hamilton, did his research) several times, and seemed particularly drawn to astronomy and to theories of the cosmos. The quiet concentration of scientists on nonhuman things attracted him [...]. (261)

このように Jeffers は天文学や宇宙の理論に惹かれ、「人間ではないもの」に対して静かに沈黙考をし、思いを馳せる科学者、とりわけ天文学者の在り方に魅せられていたというのである。このことが Jeffers を「インヒューマニズム」 (“inhumanism”)<sup>15</sup> や「トランスヒューマニズム」 (“transhumanism”) の思想へと促したことは間違いないだろう。

しかし注目すべきは、Nickerson が上記の引用に引き続き、「しかしながら彼 [Jeffers] は彼ら [科学者たち] が自ら発見したものをどう扱うかということについては信用を置いていなかった」 (261) と述べている点である。科学者たちが自分たちの発見をどのように利用していくかについては、Jeffers は信用を置いていなかったというわけである。科学に惹かれ、それが Jeffers にとって「新たな思考の出発点」 (Coffin 121-22) であると同時に、科学は「誤用」されないようにその「価値の再評価」を常に続けていかななくてはならない対象でもあったのだ (Coffin 122)。科学は「厳しい批判を必要とする」存在なのである (McDowell 185-86)。

Jeffers がそのように考えるようになったのは、一つには1895年の放射線の発見、あるいは1939年の原子核分裂の発見以降、原子力発電や核エネルギー、あるいは原始爆弾の開発の進展があったからだろう。開発がどんどん進む中、Jeffers は「ファウスト的な報復」 (権力欲、知識欲、物欲などのために魂を売ることによって人類が自らの手で絶滅してしまう可能性) について考えるようになったと Nickerson は分析している (cf. 261-62)。<sup>16</sup>

以上のような科学に対するスタンスを持つ Jeffers が “Science” というタイトルの詩を書いている。批評家があまり取り上げることもない小品ではあるが、今日的には非常に重要なメッセージを送ってくれている作品である。Jeffers が1924年の段階で、Lawrence と同時期に、科学が生み出す恐るべき事態を予言していたことは注目に値する。さっそく以下に引用してみよう。

Man, introverted man, having crossed  
In passage and but a little with the nature of things this latter century  
Has begot giants; but being taken up  
Like a maniac with self-love and inward conflicts cannot manage his hybrids.

Being used to deal with edgeless dreams,  
Now he's bred knives on nature turns them also inward: they have thirsty points though.  
His mind forebodes his own destruction;  
Actaeon who saw the goddess naked among leaves and his hounds tore him.  
A little knowledge, a pebble from the shingle,  
A drop from the oceans: who would have dreamed this infinitely little too much? (Volume I 113)

人間、内向的な人間は、今世紀になって、  
生きずりに少しばかりの自然のものと交配をすることで、  
巨人を生み出してしまった。だが、偏執狂のように、  
自己愛と内的葛藤に翻弄され、自分の生んだ雑種の産物が手におえなくなる。  
ぼんやりとした夢を追うことに慣れていたため、  
自然に向ける刃物を生んだ今、その刃を内に向けてしまった。その鋭い先が血に飢えているに  
もかわらず。  
人間の理性は自らの破滅を予感する。  
木の葉の間から女神の裸体を見たアクタイオン、彼の猟犬が彼を引き裂いた。  
少しばかりの知識、砂利浜の一つの小石、大海の水の一滴。  
こんなに限りなく小さいものが、こんな手に余るものになるなどと、一体誰が夢想できただろ  
う。

批評家の中にはこの詩をあまり高く評価しない者がいるのは確かである。Delmore Schwartz もやはり辛口の論評をしている。Schwartz は、“Sources of Violence”の中で“Roan Stallion”などの詩中の人物たちが、詩人である Jeffers の感情によって突き動かされており、そこには人物たち自身の生活に根差した情感、あるいはしかるべき動機といったものが欠落していると論じた後、同様のことが“Science”についてもいえると主張する。

The same lack is present in the lyrics, and as in the narratives it was a narrative lack, so in the lyrics what is absent betrays itself in lyrical terms. The [...] poem, “Science,” is worth quoting as an example to justify this judgment and also as a typical statement of doctrine [...]. (139)

裏を返せば、“Science”は詩人の思い、詩人の訴えたい「教義」があまりにも詩の前面に出すぎて  
いるということになるだろう。この点については鑑賞者の好みに左右されるかもしれない。詩とい



うジャンルが小説に比して詩人の思いを前面に出すことが許容されやすいものであることを考えると、この批判はそれほど重要な問題ではないといえるだろう。では、詩の「語り」不足の問題はどうだろう。この論点については Schwartz が更に次のように論を展開している。

What is to be noted here is the number of shifts the poet finds necessary in order to state the observation which concerns him. The machines of science which man cannot manage are named as giants, hybrids, knives. The knowledge of science which makes possible these machines is successively compared to a vision of Diana, a pebble, and a drop of water. The classical allusion to Actaeon's vision of the goddess is also in abrupt disjunction with the previous metaphor, man as a dreamer who has bred knives and as an introvert who has begotten giants. There is no rule or law which makes it impossible for a poet to go from one metaphor to another even in a very short poem, but such a transit can only be justified if it accomplishes some expressive purpose. Here the shifts, however, weaken each metaphor, preventing the reader from getting a clear picture of a thing, process or condition, by means of which to grasp the notion and the emotion in question. Actaeon's vision of Diana is plainly not at all symmetrical with man as a begetter of dangerous giants. And the reason for this disorder is the desire of the poet to state an emotion about modern industrialism or armament in terms of the belief—too general to be meaningful—that knowledge is a dangerous thing for man. (139-40)

Actaeon が女神を覗き見するという後半の隠喩があまりにも唐突すぎて、前半の隠喩（夢想家で刃物を生み出した人間、内向者で巨人を生み出してしまった人間の隠喩）と有機的につながっていない、しかも、隠喩のそのような前半から後半へのシフトは、少なくともこの詩においては鑑賞者に煙に巻く結果に終わっており、それぞれの隠喩の効果を弱めてしまっているというわけである。しかし、一度じっくりと詩を味わってみよう。隠喩に満ちているため、鑑賞者は知識を駆使し、想像力をたくましくして詩のメッセージを読み解く必要がある。

詩の前半に登場する「巨人」が意味するものは、人類が自ら生み出したにもかかわらず手に負えなくなってしまうもの、それはまさに今の核兵器や原子力発電を想起させるだろう。そういう意味では Jeffers は確かに時代を先取りして未来を予言していたといえる。“Science”がまさに「核兵器出現を予告した詩」といわれる所以である。<sup>17</sup>

前半部分における巨人誕生の予言のメッセージと後半の Actaeon のエピソードと一体どのような関係があるというのだろうか。ギリシャ神話で Actaeon といえば、Artemis の水浴姿を見たために、彼女に呪われ鹿に変えられ、自分の猟犬に殺されてしまう漁師のことである。Artemis を自然

に、Actaeon を人間、そして彼の猟犬を科学に置き換えてみよう。すると詩は次のような隠された解釈を容認するだろう。人間が自然に興味を持ち、覗き見をする、つまり、人間が自然に関心を抱き、その自然の秘密を探るべく自然を探究し、科学を発展させてきたが、その行為は自然の怒りをかい、Actaeon が鹿に変えられてしまったように、その自然の復讐を受けることになるという解釈である。猟犬がどうして科学に譬えられるのだろうか。それは、科学と同様、猟犬が自然界で狩りをする人間にとってのベストパートナー、いわば人類の発展のサポーターとして、非常に役に立つ存在であるからだ。この詩は、Actaeon のように自然をあまりにも好奇の目で解明しようとする、最も頼りにしていたはずの猟犬により殺されてしまう、つまり、人間はこれまで、自然科学を発達させることで自然を解明しようと躍起になってきたが、最後には自らの強力なパートナーであった科学そのものにより滅ぼされてしまうという寓意として読むことができるのである。

猟犬はあくまで自然界の生き物であり、人工的な科学にたとえるのは不適切だと反論が可能かもしれない。しかし、科学で生み出された産物も人工の手が加わっているとはいえ、すべての粒子や物質は本来自然界のものから生み出されたものであることを考えると、猟犬も同様の見方ができるだろう。実際、人間は犬どうしの交雑を人口的に繰り返し、人間が猟をするのに都合のいいように品種改良を実施し、今日の猟犬を生み出したのである。もちろん猟犬としての更なる訓練も、人工の手を加えたことの譬とみなすことはできるだろう。以上のことを念頭に置くと、猟犬の生産過程は、まさに前半の詩行における「いきずりに少しばかりの自然のものと交配をすること」に一致するのである。しかも、そのようにして生み出した猟犬の牙が人間自らに向かう Actaeon の物語は、前半の詩行における人間の生み出した巨人、つまり科学という人工的に生み出したものが手に負えなくなり、自らの破滅へと向かうというメッセージを改めて読者に想起させることになる。詩は、まさに人類の滅びの警告となっているのだ。

以上のように、詩におけるギリシャ神話への言及の意義を考慮に入れると、重要なメッセージが明らかとなった。Artemis と Actaeon、Actaeon と猟犬との関係を見る時、そこには自然と人間、そして人間と科学との関係性が明確な構図として浮かび上がってくるのだ。この詩は、科学の恩恵に浴し科学をよく知る詩人が、自然に対する科学の利用の仕方を間違えると人間は自然の報復を受け、まさに科学によって滅ぼされるだろうと訴える警告の詩なのである。<sup>18</sup> William H. Nolte が述べるように、「“Science”の [……] 詩行に見られる予言的な真実について、今日異論を唱える者は一人としていない」(214) だろう。

科学を中心とする文明に浸りきっている現代人、「人形」のようになってしまっている現代人が「再び人間らしくなる」ためにはどうすればよいのかを“Sign-Post”は教えてくれる。

Civilized, crying how to be human again: this will tell you how.  
Turn outward, love things, not men, turn right away from humanity,  
Let that doll lie. Consider if you like how the lilies grow,  
Lean on the silent rock until you feel its divinity  
Make your veins cold, look at the silent stars, let your eyes  
Climb the great ladder out of the pit of yourself and man.  
Things are so beautiful, your love will follow your eyes;  
Things are the God, you will love God, and not in vain,  
For what we love, we grow to it, we share its nature. At length  
You will look back along the stars' rays and see that even  
The poor doll humanity has a place under heaven.  
Its qualities repair their mosaic around you, the chips of strength  
And sickness; but now you are free, even to become human,  
But born of the rock and the air, not of a woman. (Volume II 418)

自己の外に、つまり自然界に目を向け、物事を愛し、人類から即座に目を逸らせと詩人は訴える。そうすれば、物事がいかに美しいかがわかるだろうというのである。「衰れな人形のような人類」であっても、その居場所を確保してくれている壮大な自然が目の前に存在するのである。人間であることに対する優越感から脱却し、自然界の岩や大気から生まれたという意識を持つことをよしとする。果ては自然界のタカに食べられ、その体の一部になることが肉体の終焉としては「いかに崇高であるか」と豪語する最晩年の Jeffers。「Vulture」にそのメッセージを見てみよう。

I had walked since dawn and lay down to rest on a bare hillside  
Above the ocean. I saw through half-shut eyelids a vulture wheeling high up in heaven,  
And presently it passed again, but lower and nearer, its orbit narrowing, I understood then  
That I was under inspection. I lay death-still and heard the flight-feathers  
Whistle above me and make their circle and come nearer,  
I could see the naked red head between the great wings  
Bear downward staring. I said, "My dear bird, we are wasting time here.  
These old bones will still work; they are not for you." But how beautiful he looked, gliding down  
On those great sails; how beautiful he looked, veering away in the sea-light over the precipice. I  
tell you solemnly

That I was sorry to have disappointed him. To be eaten by that beak and become part of him, to  
share those wings and those eyes—

What a sublime end of one's body, what an enskyment; what a life after death. (Volume III  
462)

自己の肉体をさえ放棄することを「崇高な」こととする、いわば「放棄の美学」ともいうべき壮絶な Jeffers の人間観にひるむ現代人もいることだろう。しかし、これこそが、人間から人間ではないものに、つまり自然界の物事に焦点をシフトすることを提案する「インヒューマニズム」の思想家 Jeffers の真骨頂なのだ。

#### 結び

Lawrence と Jeffers 。両者共に現代における科学万能主義に対する否を訴えた詩人として、「悲劇的な」現代社会に生きる我々の前に立ち現れる。19世紀における科学の進歩と比較すると、20世紀も60年代に入ってから科学技術の進歩のスピードはとりわけ著しく、人類に多くのものをもたらした。Lawrence の科学に対する批判が、科学進歩の黎明期であったのに対し、Lawrence より32年も長生きをして、まさに現代科学の著しい進歩を目の当たりにした Jeffers は、科学が人類に与える大きな希望と同時に恐怖といった、まさに二律背反的な感情の中で板挟み状況を体験したことだろう。

両者共に科学や機械などを無批判に生活の中に取り入れることに警告を発している点では同じ立場に立っているものの、両者には決定的な相違点もある。人間の機械化を憂い、それを全面的に拒否する Lawrence と、歴史的に見ても Jeffers ほど科学に造詣の深かった詩人はいないと Nolte が述べる (cf. 213) ほど科学の恩恵を受けた Jeffers 。知れば知るほど、欲深い人間のことを知れば知るほど、その悪用の可能性と同時にそれがもたらす恐怖を予見し、機械や科学文明が自然や人類に与える恐るべき未来を予言した Jeffers 。

また、*Apocalypse* で「太陽と共に始めよ」(126)と訴える Lawrence の思いは、やはり人間の生命力の回復にあり、最終的に人間そのものの在り方に関心がある Lawrence と、機械文明を批判するという同じ土台に立ちつつ、“Signpost”や“Vulture”で見てきた通り、人間を自然の中で相対化し、人間そのものよりもむしろ自然そのものへと目を向けた Jeffers では、その立ち位置はおのずと異なってくる。人間で在ることにこだわり続けた Lawrence と、人間であることさえ自然の中に相対化してしまい、脱人間中心主義への道を切り開いた Jeffers 。とりわけ Jeffers の「インヒューマニズム」の思想を考えると、彼の中で人間は自然界の中で突出した特別の存在ではなく、あくまでその

一部に過ぎないという脱人間中心主義の思想がうかがえるのだ。両者にはこのような決定的な違いがある。しかし、本稿で強調したいのは両者共に、科学、機械文明の告発者として、人間の未来を真剣に考え、人類への警告を一貫して発し続けたという点である。

肉体を具えた生命体としての人間がいかに生きるべきか、Lawrence は真正面から我々に問題を提起する。「単に死んでいないからといって生きていることにはならない」と生きることの意味、意義をしっかりと考えることを我々に問いかける Lawrence。

今、科学を手放すことができなくなっている人類は、機械文明にどっぷりと浸かってしまっている現代人は、今後もすべてをもら手を挙げて受け入れ、このまま突き進んでよいのかという問題を我々に投げかけ、今こそ心新たに問いかけるべき時だと訴える Jeffers。もっとも彼は、科学そのものは重要だといっており、問題なのはその利用の仕方だという。誤用されたり、不正使用されることの恐怖、それが人類に及ぼす影響について憂いていたことは間違いない。

科学の功罪については進歩をひたすら求め続けるのではなく、今こそ人文的な発想で、科学と人間の在り方をしっかりと見据え、未来を再構築し直す必要があるのだ。とりわけ福島原子力発電所の惨事を経験してしまった我々現代人は、Jeffers と Lawrence の詩それぞれは、小石のような「ちっぽけな」存在かもしれない。しかしそれがまとまれば大きな効力を奏する石つぶてとなる。人類の未来のために人類に投げつけられる石つぶての痛みを我々現代人が真摯に受け止めるかどうか、今、我々は岐路に立たされている。

科学や機械文明は確かに人類に多大なものを与えてくれた。利便性ももちろんそのうちの一つであろう。だがしかし、ドナルド・キーン言葉を最後に付しておきたい。「便利さは美の一番の敵である。」

注

- <sup>1</sup> もっともタオスの素晴らしさを書き記した Lawrence のエッセイは、現在でも読者を魅了する小品になっており、Jeffers の方もタオスについての短詩を書いているが、いずれも Luhan を満足させるものではなかったという (cf. Karman 129)。カーメルの地を自らの詩の源泉の地と定めた (cf. McDowell 182) Jeffers にとって、タオスにはそれほど魅了されることはなかったのだろう。
- <sup>2</sup> このような機械人間批判は *More Pansies* 以前にも見られることを指摘しておこう (cf. “The Factory Cities” *Nettles in CP* 586)。また、機械は最後には捨て去るべきものであると Lawrence はいう (“Things Made by Iron” *Pansies in CP* 448)。
- <sup>3</sup> “Impulse” の詩では、お金や物質を求めるのみになってしまっている現代人の衝動を「機械的な衝動」と表現している (*CP* 639)。
- <sup>4</sup> ロボット人間は人を憎むことはできても、愛することはできないと Lawrence は謳っている (“Robot Feelings” *More Pansies in CP* 648)。
- <sup>5</sup> “Two Ways of Living and Dying” (*CP* 675) の詩でも 2 通りの人間の在り方が謳われている。
- <sup>6</sup> “Signs of the Times” (*CP* 612)、あるいは“Half-blind” の詩 (*CP* 665)において Lawrence は、若者や、生命の光を垣間見ることのできる少数の人間に対する期待を寄せている。
- <sup>7</sup> 宗教に絡めた「触れ合い」の可能性について“Future Religion” (*CP* 611) の中でも謳っている。他にも“Non-existence” (*CP* 613) を参照のこと。
- <sup>8</sup> カーメルとその近辺の山々をこよなく愛した Jeffers を T.Hardy と比較して、Carpenter は “Then gradually as poem after poem celebrated the wild beauty of Carmel and of the mountains to the south, this became ‘Jeffers country’ as completely and inevitably as Egdon Heath had become ‘Hardy country’ before.” (32) と論じている。
- <sup>9</sup> Jeffers は Lawrence とは異なり、ほとんど日本では読まれることのない詩人であったが、そういう意味でも1986年出版の三浦徳弘氏による『ロビンソン・ジェファーズ詩集』は日本における Jeffers 紹介の先鞭をつけた画期的なものであり、Jeffers 再評価の先駆けとなった。氏の慧眼には改めて敬意を表したい。
- <sup>10</sup> McDowellもまた非常に要領よくJeffersの評価の推移をまとめているので参照のこと (182-83)。
- <sup>11</sup> 1930年代における Jeffers 評価がいかに高かったかについて、Terry Beersが次のように論じている。“In 1932, Robinson Jeffers enjoyed considerable popular and critical success. *Time* magazine featured his face on its cover, claiming that ‘a considerable public now considers [Jeffers] the most impressive poet the U.S. has yet produced’ (“Harrowed Marrow” 63). The same year Lawrence Clark Powell brought out the first book-length study of Jeffers’s poetry, *Robinson Jeffers: The Man and His*

Work. And soon after, S.S. Alberts produced his *Bibliography of the Works of Robinson Jeffers* in 1933, which Frederic Carpenter notes was issued by a commercial publisher just eight years after the publication of Jeffers's first mature book of poems, 'a fact perhaps unique in the history of literature' (*Jeffers* 43)." (42) また、当時の批評家たちの動向については Carpenter (43) を参照のこと。

<sup>12</sup> 1960年段階の Jeffers 再評価の気運の高まりについては、Gregory が次のように説明している。

"It can be said that in recent year [1961年当時] Jeffers has been a poet without critics, but this does not mean that his name has been forgotten, his books unread, or his plays in verse neglected on the stage. [...] The initial advantage of rereading Jeffers' poetry now is that it can be approached without the formulas of critical fashions ringing in one's ears. Since 1925 he has published more than fifteen books of verse—a quantity of poetry which resembles the production of his ancestors, the romantic poets of nineteenth-century Britain." (16、下線筆者)

<sup>13</sup> Nolteは、Jeffersが「一流の詩人」というべき独特のスタイルを持っていると評価している。他に George Sterling や Rose Benét も、詩に触れただけで、それが誰の詩なのかがすぐにわかるほど独自のスタイルを持っていると Jeffers を評価しているという (213)。

<sup>14</sup> Jeffers の科学についての造詣の深さについて Coffin が以下のように説明している。

As commentators like Waggoner have shown, Jeffers is a poet with an unusually broad acquaintance with contemporary scientific theories and terminology.<sup>41</sup> As a student of medicine, forestry, and physics, Jeffers was aware of much of the scientific thought of the day, and presumably his visits to his brother, an astronomer at the Lick Observatory, kept him at least casually informed about advancements in astronomy.<sup>42</sup> (120)

<sup>15</sup> "inhumanism" については Jeffers 自らが *The Double Axe and Other Poems* の "Preface" の中で "a shifting of emphasis and significance from man to not-man; the rejection of human solipsism and recognition of the transhuman magnificence" と定義している (xxi)。

<sup>16</sup> Nickerson は具体的に核エネルギーによる人類絶滅の可能性を Jeffers が苦慮していたという (261-62)。興味深いことに Lawrence も科学兵器としての毒ガスや空気爆弾の恐ろしさを訴えている ("Murderous Weapons" CP 715)。

<sup>17</sup> 「無視された天才詩人による核兵器出現を予告した詩」とも命名される「科学」の詩により、Jeffers は現代の核戦争の可能性だけでなく、原子力発電の危険性を当時において既に予見していたのである (cf. <http://tarkestra.exblog.jp/15825095/>)。

<sup>18</sup> 西村杏子氏は、この詩について「少しばかり科学が進歩したかといって人類は自分達ばかりでなく自然をもまきこんで破壊に向かおうとしていると警告している」(167) と論じている。また、Nolte も、自然を好奇の目で捉え、我が物にしてしまいたいという人類の欲望が、科学という



ものによってそれを達成しようとした人類のコントロール下に留められなくなってしまうことの恐怖を伝えんとして吐露した作品であると論じている (cf. 213)。

#### Works Cited

- Beers, Terry. "... a thousand graceful subtleties" : *Rhetoric in the Poetry of Robinson Jeffers*. New York: Peter Lang Publishing, Inc., 1995.
- Carpenter, Frederic I. *Twayne's United States Authors Series: Robinson Jeffers*. Ed. Sylvia E. Bowman. New Haven: Twayne Publishers, Inc., 1962.
- Coffin, Arthur B. *Robinson Jeffers: Poet of Inhumanism*. Madison: The U of Wisconsin P, 1971.
- Gregory, Horace. "Poet without Critics: A Note on Robinson Jeffers." *Centennial Essays for Robinson Jeffers*. Ed. Robert Zaller. London and Toronto: Associated U Presses, 1991.
- Jeffers, Robinson. *The Selected Letters of Robinson Jeffers, 1897-1962*. Ed. Ann N. Ridgeway. Baltimore: The Johns Hopkins P, 1968.
- . *The Collected Poetry of Robinson Jeffers Volume I 1920-1928*. Ed. Tim Hunt. Stanford: Stanford UP, 1988.
- . *The Collected Poetry of Robinson Jeffers Volume II 1928-1938*. Ed. Hunt. Stanford: Stanford UP, 1989.
- . *The Collected Poetry of Robinson Jeffers Volume III 1938-1962*. Ed. Hunt. Stanford: Stanford UP, 1991.
- . *The Double Axe and Other Poems*. New York: Random, 1948; repr. New York: Liveright, 1977.
- Karman, James. *Robinson Jeffers: Poet of California*. Brownsville (OR): Story Line P, 1995.
- Lawrence, D.H. *Apocalypse*. Harmondsworth, Penguin Books, 1977.
- . *The Complete Poems of D.H. Lawrence*. Ed. Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts. Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1980.
- . *Lady Chatterley's Lover*. Ed. Michael Squires. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- . *Last Poems in The Complete Poems of D.H. Lawrence*.
- . *More Pansies in The Complete Poems of D.H. Lawrence*.
- . "Nottingham and the Mining Countryside." *Phoenix*. Ed. Edward McDonald. New York: The Viking P, 1974.
- Luhan, Mabel Dodge. *Lorenzo in Taos: D.H. Lawrence and Mabel Dodge Luhan*. Santa Fe: Sunstone P, 2007.

- McDowell, Michael. "Robinson Jeffers, 1887-1962." *Fifty Key Thinkers on the Environment*. Ed. Joy A. Palmer *et.al.* London and New York: Routledge, 2001.
- Nickerson, Edward A. "The Politics of Robinson Jeffers." *Centennial Essays for Robinson Jeffers*.
- Nolte, William H. "Robinson Jeffers as Didactic Poet." *Critical Essays on Robinson Jeffers*. Ed. James Karman. Boston: G.K.Hall & Co., 1990.
- Palmer, Joy A. *et.al.* eds. *Fifty Key Thinkers on the Environment*.
- Schwartz, Delmore. "Sources of Violence." *Critical Essays on Robinson Jeffers*.
- Vardamis, Alex A. "Robinson Jeffers: Poet of Controversy." *Centennial Essays for Robinson Jeffers*.
- Zaller, Robert. "Robinson Jeffers, American Poetry, and a Thousand Years." *Centennial Essays for Robinson Jeffers*.

- 石原浩澄. 「『チャタレー卿夫人の恋人』における産業社会と貴族——クリフォード・チャタレー論」. 『ロレンス研究——「チャタレー卿夫人の恋人」』. 朝日出版社, 1998.
- 田部井世志子. 「Lady Chatterley's Lover における森との絆——エコロジ的『想像力』の意義——」. 『北九州市立大学文学部紀要』第75号, 2008.
- 西村杏子. 「'inhumanism' の自然観」. 『緑と生命の文学——ワーズワス、ロレンス、ソロー、ジェファーズ』. 福岡ロレンス研究会編. 松柏社, 2001.
- 三浦徳弘訳. 『ロビンソン・ジェファーズ詩集』. 国文社, 1986.
- 吉村宏一. 「『チャタレー卿夫人の恋人』における『歴史』」. 『ロレンス研究——「チャタレー卿夫人の恋人」』.